

プロジェクト研究所 業績報告書（最終報告）

【研究プロジェクトの名称】

日本・フィリピン 学生交流と異文化理解プロジェクト

【研究所の名称】

実践女子大学 異文化理解プロジェクト 研究所

【研究所員】

所長 人間社会学部人間社会学科 准教授 阿佐美 敦子
副所長 学務部 部長 荘司 伸一
研究員 短期大学部英語コミュニケーション学科 教授 武内 一良
研究員 東京外国語大学大学院 総合国際研究員 教授 小川 英文
研究員 日赤看護大学看護学部 専任講師 遠藤 花子

【設置期間】

2014年4月1日 ～ 2017年3月31日

【研究課題（テーマ）】

本学ではこれまでに、英語圏ではアメリカ・イギリス・カナダ・オランダ・オーストラリアを、アジア圏では中国・韓国を留学・研修の場として久しいが、急激なグローバル化が必至な昨今、従来の英語圏、あるいは欧米に関する歴史および生活文化の理解にとどまらず、アジアの一員として極めて重要な立場を有する日本にあって、東アジアのみならず、成長著しいASEAN 諸国とのより良い国際交流が最重要課題の一つと考えられる。

歴史が示すように、異文化の格差を理解するためには、人種、イデオロギーの諸問題から、衣食住にまつわる文化、教育、芸術等、一切にかかわる広範囲な社会文化レベルまで注目することが求められている。異文化間コミュニケーション能力の獲得が、机上を超えて実働化されなければ用をなさない今、日本との歴史的かかわりの深いフィリピンの次代を担う学生たちと本学の学生が、GEO(Global Education Online)と称して、SKYPE を通じて交流し、共に第二言語である英語を用いて、どれだけ有効に互いの文化を発信し、理解し得るか、異文化への気づき、文化の共有の可能性について検証することを課題とする。

高度な英語力を有するフィリピン人学生に対し、本学の参加学生は、ほぼ全員が平均的な日本の大学生レベルの英語力を有する者であった。そうした中級、あるいは中級にも満たない学生が、外国人を相手に英語のみを使って、自文化を上手に発信し、相手の文化を十分に理解し、豊かな心の交流は可能かを問うことも、検証すべき課題のひとつとした。

【研究概要】

本プロジェクトにおいて、プロジェクト参加学生は 2014 年度、2015 年度、2016 年度、2017 年度の後期の授業期間中、フィリピン、セブ島の伝統校、ヴィサヤ大学の学生とそれぞれ 3 回のスカイプ交流を実施した。交流は約 45 分間の自文化を紹介するプレゼンテーションの交換後、フリーカンパセッションの時間を適宜設けるといって進行した。尚、2016 年度に限っては、2 月に本学学生が現地訪問を行ない、ヴィサヤ大学内にて対面での直接交流の実現が叶った。

交流に臨むにあたり、学生たちは皆でテーマを考え、構成を考え、英語原稿を作り、遠藤 研究者と阿佐美所長で語彙・文法、また発音等の正誤についてチェックを入れ、さらに視覚的にも優れた説明資料を作り、リハーサルを重ねては意見を出し合うという作業を行った。各回とも、最低 6 回のリハーサルを経て、本番に臨んだ。

【研究実績（研究員の活動実績含む）】

2014 年度第一回交流では、世界的な人気を誇る日本を代表するキャラクターのひとつに、「キティちゃん」があり、フィリピンも例外ではないことから、プレゼン内容として本学学生は、日本中の観光地で売られている、いわゆる「ご当地キティちゃんボールペン」を青森から沖縄までを表した計 15 本用意し、それぞれの名所、名物を紹介した。これらボールペンをあらかじめ QQ イングリッシュに届け、モニターを通してだけでなく直に見てもらい、より分かり易くなるよう工夫を凝らした。一方、ヴィサヤ大学のプレゼンテーションでは、美しい写真を多用しながら、フィリピンの地理的概要に始まり、長い歴史的経緯から多文化が生まれたこと、様々な民族、言語、宗教、年中行事が紹介された。

2014 年度第二回交流では、ちょうど真冬の交流なので、フィリピンにはない冬のファッションを自分たちがモデルとなり、横長の会議室の床をランウェイに見立て、モデルウォークで紹介した。続いてフィリピンでも人気の寿司の数々、流行りのグルメを写真を用いて数種紹介し、また原宿で人気のポップコーンを入手して、なんとポップコーンキャッチを成功させ、大喝采を受けた。さらにはスタジオジブリ作品の紹介、読売ジャイアンツの紹介、ドラえものの紹介や、嵐の曲を流して聞かせたり、AKB48 の曲を流すにとどまらず、皆で踊って見せるという大胆な構成となった。

ヴィサヤ大学学生のプレゼンテーションは、フィリピン中の美しい島々の紹介に充てられた。今回は 100 枚近い写真が用意され、フィリピンにはこんなにも素晴らしい場所があるということを誇らしげに話す様子が微笑ましく感じられた。

2014 年度第三回交流では、日本に訪れたように感じてもらえるよう、多くの美しい冬の風景を写真で、あるいは動画で紹介し、続いてフィリピンではほぼ不可能なウィンタースポーツを有名選手とともに紹介した。最後を飾ったのは全員で半てんに見立てた浴衣をまとうって、ソーラン節を踊って見せたところ、元来、ダンス好きなヴィサヤ大学学生も躊躇なくモニターの向こうで踊り出し、期待を超えたダンスの競演が実現した。

様式 15-1

ヴィサヤ大学学生のプレゼンテーションでは、学生たちは机を離れ、より自由に動くことのできる環境となっていた。まず、スペインの伝統を引き継ぐ「コートシップ」が動画で紹介され、どのように好きな女性に告白するかを教えてくれた。続いて、古今の音楽、建築、民族衣装、ローカルフードを紹介した後、ラストはやはりダンスのお返しでめた。

2015年度第一回交流では、現代の日本を象徴すると考えられる暮らしの場面を様々紹介した。ポップアイドルしてAKB48の握手会やチケットの取りにくい嵐のコンサートの映像を流し、また今現在、流行っている新しいアニメ作品を紹介した。続いて、フィリピンの学生に珍しがってもらえるような日常の風景、行列のできるラーメン店、満員電車に乗り込む方法、車内でのマナー、時刻表など、電車のないセブの学生には興味深いはずのテーマである。さらには機体一杯にポケモンが描かれたジャンボ機や、リラックマのイラストや他にも色々な広告が描かれている山手線の車両も紹介した。さらにはキャラクターつながりで、最近よく作られるようになったキャラクター弁当をいくつも写真で紹介し、ドラえもんやポケモンを模した弁当を見たヴィサヤ大学学生からも歓声が上がった。最後には弁当つながりで、白米が大好きなフィリピン人の胃袋に訴えようとコンビニのおにぎり(実物)をカメラ前に持ち、正しいラップの開け方と評してキレイにおにぎりを取り出し、カメラに向けて味わうという演出も見られた。

ヴィサヤ大学学生(参加者6名)のプレゼンテーションでは、冒頭から流行っているポップスに合わせてダンスの数々が披露されたが、これは歌と、とりわけダンスの得意な一人の男子学生のスキルに依るものである。非常にフレンドリー、笑顔いっぱいの青年のキレキレなダンスが、東京・セブの距離を一気に縮めてくれた。次には彼らが愛してやまないセブの歴史遺産、マゼラン・クロス、メトロポリタン・カテドラル、サントニーニョ・バジリカなどを歴史の過程も含めて丁寧に話してくれた後、テーマはガラッと変わり、自分たちが地元の日本食レストランに出掛けた様子を撮影し、楽しい感想を添えて見せてくれたが、初挑戦のワサビに顔をしかめるなど、演出も巧みであった。最後には、伝統的なダンスを皆で踊り、フィリピンの伝統文化の一端を本学学生に教えてくれた。

2015年度第二回交流では、日本にあってフィリピンにはないものを紹介したいと考え、それは四季であるという結論に至った本学学生たちは、春夏秋冬を皆で分担し、よりわかりやすい紹介ができないか、様々な工夫をこらした。

春の紹介では、フィリピンでもよく知られ、憧れられているという桜、お花見にスポットを当て、各地の素晴らしい桜を紹介しつつ、日本人ならではのコミュニケーション・ツールとしてのお花見の習慣について楽しく話した他、お花見のつきものの数々の料理も、写真を多数用いて紹介した。

夏の紹介では、有名な花火大会、夏祭りの紹介にとどまらず、こうしたイベントに是非、着ていきたい服装として、浴衣を見せ、カメラの前で着付けを行った。秋の紹介では、最近の現象としてハロウィーンをコスプレで楽しむことが子供たちだけでなく若者の間で年々、一般的になり、特に本学のある渋谷のスクランブル交差点では大々的に人々が集まる様子

様式 15-1

を動画で紹介したが、これにはヴィサヤ大学の学生たちも驚きの表情でとても面白がっている様子であった。冬の紹介では、フィリピンとは異なるお正月の過ごし方に触れ、またおせち料理の一品、一品の持つ意味まで丁寧に説明した。除夜の鐘をつく習慣を話し、仏教の煩悩のあり方について紹介したが、皆、キリスト教徒であるヴィサヤ大学学生たちは、自分で鐘をつくことが煩悩を消すという概念を初めて耳にし、興味深く受け取った。

ヴィサヤ大学学生のプレゼンテーションでは、彼らが普段、好んで口にしているローカルフードの数々が写真で紹介された。日本人にとっての味噌汁のように日々の食卓に欠かせないというシニガンスープ、甘辛だれで食べる焼き鳥を始め、お祝いの席には必ず登場する子豚の丸焼き、さらには孵化直前のアヒルの卵を茹でたバルットの見た目の衝撃度は高く、本学学生を驚かせた。次にミュージックアイコンと評して、彼らが好きな人気歌手の面々が紹介され、当然のように歌のおまけも忘れない。さらに今まさに人気を博している TV ドラマを紹介し、「知っていますか？」と聞かれても、本学学生には誰もわからず、少し残念な表情がうかがえたが、これからはフィリピンに限らず、東南アジアのアーティストの日本での活躍が見られることが望ましい。草の根の文化の交流は、普通の人びとの心の交流に他ならず、それは政治を超える力があると考えられる。最後に、電車はないけれど、こんなに楽しい乗り物がある、とばかりに、伝統的に乗られてきたカレサと呼ばれる美しく飾り立てた馬車や、庶民の足である派手な装飾のジープニー、さらに 6 人乗りでさっそうと走るバイクなどが紹介された。

2015 年度第三回交流では、「フィリピンの皆に日本の素晴らしいものを知らせたい」という希望が多く、素晴らしいもの=世界遺産を紹介しようという結論に至った。8 名の参加学生がそれぞれ一か所ずつ、自分の好きな世界遺産を、好きという想いを込めて紹介するという課題に取り組んだ。ヴィサヤ大学学生は、美しい写真を見ながら、白神山地→日光東照宮→富岡製紙工場→富士山→姫路城→原爆ドーム→厳島神社→屋久島の順に、日本の旅をバーチャル体験した。一点、富岡製紙工場の説明時は、シルクの優れた面を示すためにシルク石鹸をカメラ前で泡立て、手を洗って見せるという演出があったものの、初回および二回目のプレゼンテーションと比較して硬いテーマであるがゆえに、必然的に動きは乏しくなり、つられる形で表情も乏しくなってしまった感があり、これは次年度への反省点となった。

ヴィサヤ大学学生によるプレゼンテーションは初回および二回目のそれと比べてさらに賑やかなものになり、多くの動画を用いることで「見て楽しい」プレゼンテーションを作っていたが、これは英語のスピーキングスキルだけでなく、リスニングスキルも乏しい本学学生への、彼らなりの優しい気遣いの現れとも考えられる。まず、クリスマスから元旦までの過ごし方が紹介された。24:00 に家族で起きてご馳走を食べ、プレゼントを交換し、教会で皆で祈る聖なる日であるクリスマスに対し、大晦日から元旦に掛けては仲間皆で騒いで楽しむ時間。水玉模様の服を着て、12 の丸い果物を食べ、沢山のコインをポケットに入れば幸運がやってくるそうである。夜中、通りのあちこちで花火が上がり、大勢が大声で叫ぶ風景が年明けの「あるある」だそうで、この行為は単にふざけているわけではなく、大きな

様式 15-1

声、あるいはトランペットのような大きな音を出す楽器で、邪悪な魂、悪魔が新年に來ないように追い払うためである。

2016年度第一回交流では、「日本の四季」をメインテーマに、四季折々の風物詩を様々に工夫を凝らして紹介した。春の象徴として、ひな祭りやお花見、端午の節句などを紹介し、続いて夏の紹介では、お盆の風習、日本の幽霊の特長、盆踊り、そして盆踊りの会場には欠かせない屋台グルメの紹介と続き、カメラ前でのたこ焼きの実食はヴィサヤ大学学生たちのため息を誘った。日本の夏祭りの代表格である祇園祭を紹介し、コンチキチンの音をきっかけに、一般に外国人には魅力を感じにくいと言われる風鈴の音を聞かせる一幕も。フィリピンにはない、流しそうめんにも注目が集まった。秋の紹介では、やはり味覚が重要と考え、栗や柿、松茸、りんごにみかんといった、フィリピンでは食べられない美味しい味を伝えた。紅葉狩りも同様にフィリピンではあり得ないことであり、美しい紅葉の写真に、驚嘆の声が上がった。七五三の紹介では、千歳飴を割って、舐めて食レポに挑戦したが、果たして味は伝わただろうか。少なくとも笑顔は伝わった。冬の紹介では、クリスマス・イルミネーションで有名なロケーションをいくつも紹介し、またクリスチャンではない日本人がどのような商業的なクリスマスを過ごすのかを話した。そして大晦日にはおそばが、お正月、家族で過ごす時間にはおせち料理が必要であることも話した。初日の出の意味もまた、宗教的な側面からも説明した。面白い工夫として、お正月の遊びである、オカメの顔を作る福笑いをやって見せ、皆の爆笑と拍手をもらった。

ヴィサヤ大学学生のプレゼンテーションでは、最初に皆の関心をひく、ストリートフードが紹介され、本学学生の注目は本場、大盛りのハロハロに注がれた。

次に話題はフォークダンスに移り、ナショナル・ダンス、オキュペーション・ダンス、レリジョン・ダンス、コートシップ・ダンス、フェスティバル・ダンス、コミック・ダンス、ゲーム・ダンス、ウォー・ダンスが次々と紹介された。続いては国歌の斉唱、そして「国の〇〇」がいくつも紹介された。それは国の武道、国の魚、国のドレス、国の動物、国の鳥であったり、国のヒーロー、ホセ・リサールについて、独立の経緯を知ることができた。最後は『カワカマイ』(Holding Hands Together) というセブアノ語の歌を披露してくれたが、本学学生も歌詞はわからずとも手拍子を合わせながら、楽しい時間となった。

2016年度第二回交流では、フィリピンではホラーが人気だとの情報を得て、日本の怪談を紹介することにした。「口裂け女」「トイレの花子さん」「雪女」の三題を、自作の紙芝居で表現し、学生たちが演技力を駆使して台詞を述べた。次に、フィリピンの学生たちはスポーツが好きであろうという憶測に基づき、日本のスポーツを紹介することにした。相撲の紹介では、頭にシリコンを入れて新弟子検査に受かった舞の海の例を挙げ、実際の試合の動画を見せながら、どのようにすれば勝ちになるかを解説した。次に、50余年前の東京オリンピック、長野オリンピックでの日本人選手の健闘を称え、2020年のオリンピックのプロモーション・ビデオを紹介して日本の盛り上がりを知らせた。日本のお家芸と言われ

る柔道、剣道についても触れ、フィリピンでも若者に人気で映画が公開された『るろうに剣心』の話題になると、ヴィサヤ大学学生側から歓声が上がった。ここでもポップカルチャーの力を再認識することになる。最後に、今流行っているものの例として、高視聴率を獲得したテレビドラマの主題歌に合わせて、「恋ダンス」を皆で踊り、カメラの向こうの皆も一緒に踊り、大拍手でプレゼンを終えた。

ヴィサヤ大学学生のプレゼンテーションでは、前回は触れられなかったセブの歴史遺産がまず、取り上げられた。それはサンチャゴ要塞に始まり、皆の心の拠り所、サント・ニーニョ教会、マゼラン・クロス、メトロポリタン・カテドラルなどに続き、ヴィサヤ大学のある古くからの繁華街、コロン・ストリートに至った。ところが話の途中でヴィサヤ大学側のモニターは黒くなり、音声もなくなってしまった。これは接続のトラブル等ではなく、セブ・シティー全体の停電が原因であると、後から知らされた。大変和やかに進行していた交流会が、このようなトラブルで突然に打ち切られることは非常に残念ではあるが、これもまた異文化の体験の一面として肯定的に受け止める態度が本学学生には十分に備わっており、喜ばしいことである。

2016年度第三回交流は、当初より計画していたヴィサヤ大学訪問が実現した。これまでの先輩たちの体験談からも、フィリピンではドラえもんやポケモンを始め、日本のアニメが大人気であることは疑いようがなく、アイスブレイクとして皆が正解できるようなアニメに関するクイズを用意した。案の定、続々と正解者が出て、その場の空気は一気に盛り上がり、次の秋葉原や池袋といった、いわゆるゆアニメの聖地と呼ばれる場所の紹介へ、スムーズな流れを生んだことはひとつの成功例であろう。次に、子供の頃に通った駄菓子屋さんの人気の駄菓子を皆に配り、実際に試食をしてもらった。笛になる飴、占いのできるチョコレート、罰ゲームにも使われるガムなど、それぞれが楽しく味わった。また駄菓子屋で売られている子供のアイテムの例として、紙風船を飛ばしたり、しゃぼん玉を作って吹いてもらったり、体験型の提示を多用した。伝統的な子供の遊びのひとつ、けん玉は本学学生がお手本を示し、練習の甲斐あって成功させ、ヴィサヤの学生も皆、挑戦した。成功させるのは難しくとも、皆、進んでトライしてくれた様子に、本学学生も心打たれた。プレゼンはここから、現代の話に移る。本学のある渋谷は、東京の中でも中心地であり、海外のメディアで取り上げられることも日常である。スクランブル交差点からハチ公像、センター街をバーチャル案内し、続けて原宿へ足を延ばし、竹下通りのクレープ点、表参道、明治神宮を見て、スカイツリーへと進む。これらの場所はアイリーン先生が来日された際、本学学生をご案内した場所でもあるので、ひとつひとつの場所がわかっただけで、当然に話は弾み、それを聞く学生たちの関心も捉えて離さない。これもまた良い工夫である。最後にはAKB48、嵐、きゃりーぱみゅぱみゅという、今の日本を象徴する現象を紹介し、なんと「君が代」を歌ってプレゼンテーションを終えるという演出とした。これは前回の交流でヴィサヤ大学学生が国歌を歌って聞かせてくれたことに起因する。

ヴィサヤ大学学生のプレゼンテーションは、全体に歌とダンスに溢れたものであった。

様式 15-1

本学学生の発表内容に呼応するように、彼らの発表もまた、子供の頃から慣れ親しんだ、フィリピン伝統の楽しい遊びの紹介で始まった。日本でも一般的なかくれんぼや、おはじき遊びといったものの他、数種類のフィリピン独自と思われる遊びを教えてくれたが、中でも彼らの一番のお気に入り、口を揃えてスパイダー・ファイティングだという。闘鶏ならぬ、闘蜘蛛か？自分の蜘蛛を相手の蜘蛛にけし掛けて、逃げたほうが負けだそうで、これはすべての子供たちの大好きな遊びということである。さあ、遊びの次は、華やかに民族衣装を着飾ったダンスチームの登場である。フィリピンの人々はとにかく歌舞音曲を好み、また上手である。最初に登場したのは、セブの守り神、サントニーニョ(幼子イエス)のお祭り、シノログ祭で神に捧げて必ず踊られるダンスである。たっぷりとした白いドレスに金の飾りを施して、女子学生の皆さんが私たちのために笑顔で舞を見せてくれた。次にはスペイン統治時代の影響を色濃く感じさせる、フラメンコに似た衣装の男女が、情熱的な恋のダンスを踊ってくれた。情熱的といえば、やはりスペインからもたらされた習慣、コートシップがあるが、恋を告白する役の学生が、友人のギター演奏で「貴女が恋しい」と女性の部屋の窓の下で歌う。男性は室内に招き入れられ、両親役の学生に質問攻めに合うという、楽しいコントのようなお芝居に、本学学生も引き込まれた。日本にもこのような習慣があったら良い？悪い？という話になった。そして会を締めくくるのは、やはり歌、歌、歌である。とりわけ歌の上手な女子学生、クリスさんのリードで、皆の歌声と手拍子が会場に響き渡った。尚、翌日にはヴィサヤ大学学生によるツアープランに沿い、丸一日のエクスカージョンも体験することができ、双方の学生たちの親交はさらに深まった。

2017年第一回交流では、各学生の出身地を紹介した。千葉県で紹介では、千年の歴史を誇る成田山新勝寺を、埼玉県で紹介では、古い佇まいが美しい川越の町並みを、山梨県で紹介では、富士山周辺の景色はもちろん、荒倉山や荒倉浅間神社にいたる雄大かつ繊細な桜の競演、そして名物、ホウトウの美味しさまでも何枚もの写真で伝えようと努めた。秋田県で紹介では、世界遺産、白神山地に生息する貴重な動物たちの存在に着目したほか、豊かに湧き出る温泉、そしてきれいな水が生む(?)秋田美人を名物に挙げた。福岡県出身の学生は、学問の神様、菅原道真公が祀られている大宰府天満宮に梅が枝餅、マリンスポーツが満喫できる志賀島を紹介した。続いて、日本を訪れる外国人がほぼ皆、観光するであろう東京のスポットの紹介に進む。東京にはあまりにも見所が多いため、限られた時間の中で魅力をわかってもらうために、今回は浅草、合羽橋、渋谷、原宿、築地の人気コースを、実際に観光する気分になってもらうよう工夫を凝らして案内した。特に築地を案内する動画、マグロの解体の様子などは、ヴィサヤ大学学生たちには珍しく映るようで、歓声が上がった。また、フィリピンでのジブリ人気を聞き、少し足を延ばして三鷹の森ジブリ美術館へも案内した。

ヴィサヤ大学学生のプレゼンでは、彼らの熱い地元愛、セブ愛を反映し、セブシティーの観光スポットが紹介された。彼らの信仰の拠り所であるサントニーニョ教会に始まり、

様式 15-1

マゼラン・クロス、歴史記念碑、大学のある大通り、コロン・ストリート、そして立派な市庁舎等々、多数の写真を示して説明してくれた。彼らの巧みな話術のおかげで、本学学生は既にセブにいる気分になれたようだ。次はセブシティーを出て、周辺の大自然や動物、農産物が紹介され、フィリピンの人々の食生活にとってお米がどれほど大切であるか、日本との共通点として示してくれた。さらにフィリピン人の信じる迷信の数々、そして最後はタガログ語の歌、「トレテ」とセブアノ語の歌、「アクティワラ」をギターの生伴奏と共に歌ってくれた。

2017年度第二回交流では、日本の様々なお祭り、私たちの日常、今一押し映画の紹介した。まず、お祭りは神仏をまつる儀式や自然に感謝する催しであることを述べ、夏に行われるお祭りに着ていきたい、浴衣の着付けを実演し、ヴィサヤ大学学生から拍手をもらった。出店の紹介では綿飴やあんず飴、射的、金魚すくい、輪投げといった遊びも紹介、その面白さを伝えた。迫力あるねぶた祭りや、色とりどりに美しい七夕祭りなど、東北六大祭りや、浅草三社祭り、サンバ・カーニバル、四国のよさこいや阿波踊り、大阪のだんじり祭りを、それぞれ動画にオリジナルの解説を付けて紹介した。次に自分たちの暮らしを紹介するにあたり、前回の交流でフィリピンでは学生はアルバイトをしないが、日本では当たり前前にアルバイトをするという相違点が判明し、そのことからどのようなアルバイトをしているのかを話したら関心を持ってくれるのではとの期待を持って、各自が仕事の様子を話した。三部として、大ヒットした映画『君の名は』のあらすじを紙芝居を用いて説明し、いかに素晴らしい作品であるか、是非、皆に観てもらいたいと力説した。最後には皆で気持ちを一つにしようと、皆が知っているはずの、テイラー・スウィフトのヒット曲、“**We are never ever getting back together.**”を一緒に歌いましょうと提案し、ヴィサヤ大学学生はもちろん大賛成し、全員で大合唱となった。

ヴィサヤ大学学生のプレゼンでは、フィリピンの人気スターカップルを数組紹介し、どのような映画やドラマに出ているのか、楽しく説明した。続いて、前回はセブの魅力的なスポットを紹介したが、今回はセブを出て、日本でも有名な観光地の魅力について語った。ボラカイ、バンタヤン、カモテスエやチョコレートヒルズなどの観光地を案内するように見せてくれた。次にフィリピンの主要産業である農業について説明し、稲作の重要性、そして生活に欠かせないトウモロコシ、スイカ、パイナップル、バナナ、カカオの生産についても教えてくれた。最後には、やはり歌である。好きになってはいけない人を好きになってしまった悲しい恋心を綴った『バイクボ』というセブアノ語の曲を、情感豊かに皆で歌って聞かせてくれた。

2017年度第三回交流では、四季のある日本ならではの一年間の暮らしぶりを、様々な行事を通して知ってもらおうとするプレゼンテーションを用意した。より楽しく生き生きとしたプレゼンテーションにするため、所々に歌を入れて、空気を盛り上げる工夫を凝らしたことも注目すべき点である。最初はお正月、元旦の紹介である。門松、しめ縄、鏡餅といった伝統の飾りつけ、お年玉や初詣の習慣を伝え、お正月の歌を合唱した。歌詞の意味は

様式 15-1

英語で示して理解してもらえるように工夫した。次に節分の紹介では各地の豆まき行事、中尊寺、成田山、浅草寺などを紹介し、恵方巻も実食して見せた。バレンタインデーには女性から男性にチョコレートをプレゼントする習慣を紹介した。ホワイトデーは、日本オリジナルである。ひな祭りの紹介でも合唱し、ちらし寿司や白酒、菱餅の説明も加える。端午の節句の紹介では、空を泳ぐ鯉のぼりを見せつつ、また合唱。七夕の紹介では、織姫と彦星の悲恋を紙芝居にして語ったほか、有名な七夕祭りである仙台七夕祭り、平塚七夕祭りを取り上げた。続いて、近年、すっかり秋の風物詩のひとつとなったハロウィーンのコスプレの様子を、渋谷のスクランブル交差点に集まる人々に触れて紹介した。そして、フィリピンとは違い、宗教的要素のほとんどない日本のクリスマスの祝い方について解説した。美しいイルミネーションの写真に、カメラの向こうからため息が漏れる。年中行事の最後は大晦日である。家族皆で大掃除を終えたら、長寿を願って蕎麦を食べ、近くにお寺があれば、煩惱と同じ108回、鐘について厄払いをするなど、伝統的な年明けの過ごし方を紹介した。

ヴィサヤ大学学生のプレゼンでは、自分たちが大好きなストリートフードが紹介され、本学学生の悲鳴を誘ったものがアヒルの孵化寸前の卵を茹でたバラットと呼ばれる、滋養豊かなおやつであった。一般にテンブラと呼ばれ、道端で揚げて売っているのは、細長いさつま揚げである。これに甘めのソースを絡めて食べるのが、皆、大好きだそうだ。揚げたての豚の皮も人気である。焼き鳥も、通りで炭火で焼かれて売っている。甘いお菓子も、彼らの毎日に必須である。好物の紹介に続いて、歌が入る。ギターやウクレレを演奏して聴かせてくれる。彼らの私たちを楽しませようとする心遣いが、ひしひしと伝わる場面であった。そして話題は再びフィリピン・フードに戻り、フィリピン風のローストチキン、ダイヤモンドライスを実食し、食レポをしてくれた。さらに歌の時間となり、なんと、フィリピンのヒット曲の日本語バージョン『あなた』を、とびきり歌唱力のあるクリスさんが独唱し、本学学生の喝采を浴びた。わざわざ日本語を練習してくれた気持ちが、何より嬉しく、彼女たちの心に響いた。彼らの最後のパフォーマンスは、セブアノ語で歌うクリスマスソングであった。

どの年度も初回は緊張で口がまともに開かない、笑顔が引きつる、原稿を読むのに精一杯といった本学学生たちであったが、徐々に打ち解けて、フリーカンバセーションを楽しむことができた。本学学生の話す英語は依然として単語の単位を脱してはいないが、それでもとにかく口を開こう、話そうという勢いが各自から感じられるようになったのは、とにかく消極的な態度を取りがちな日本人学生にとって、大きな成果である。これには、たとえ稚拙な英語であっても努力して聞き取ろうとしてくれるヴィサヤ大学学生の温かい受容の態度が貢献していることは明らかである。

【研究活動における成果】

1. 雑誌、学会発表、図書等

2015年

8月、鹿児島大学にて開催された大学英語教育学会第54回国際大会において、グローバル化教育の先進的研究事例の分野にポスターセッションの参加を行い、計3日間、来場者より多くの関心を示していただいた。

12月、東洋英和女学院大学院において開催された日本「アジア」英語学会全国大会においては、セッション前後の本学学生の意識の差異、自信の変化、向上に焦点を当てて研究発表を行い、大きな反響を得ることができた。

2016年

9月、名古屋外国語大学にて開催された異文化コミュニケーション学会年次大会において、「多文化共生社会への構築に向けて：アクティブ・ラーニングと異文化コミュニケーション能力」のテーマのもと、主に参加学生の歴史認識の不足について取り上げ、今後のカルチャラル・リテラシー獲得の方策のために何が可能か、可能でないかを発表し、こちらも多くの関心を得た。

2. 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

2014年度

何ら前例がなく、先輩からの助言もなく、まったく一から挑戦した交流が成功裏に終わったことには、参加学生が皆、人間社会学部の学生であることも上手く働いたと考える。本学では共通科目の「実践入門セミナー」に於いて、新入生全員が自己表現の方法として既にプレゼンテーション技術について学ぶのだが、人間社会学部のカリキュラムでは、1年次後期の「演習Ⅰ」、さらには2年次の「演習ⅡA」「演習ⅡB」と、専門ゼミに所属する3年次を前に、既に2年間を通してプレゼンテーションであったり、ディスカッションであったり、またディベートの技術を学ぶ時間を多く設けているため、学生のそうしたスキルは極めて高いと言える。

本プロジェクトの場合も、参加学生たちのヒアリングに寄れば、英語力を別とすれば、自分たちのプレゼンテーションの企画構成、視覚化のデザイン力、表現力といった、優れたプレゼンには欠かせない項目について高い評価を述べている。聞き手の理解を促すに足る、しっかりした資料原稿を整え、必要に応じて表情、ジェスチャー、ダンスまでも演出するスキルは、高く評価されて当然である。また、彼女たちの素晴らしい点として、素晴らしい聞き手であることも評価される。自分たちのプレゼン後には、相手のプレゼンを鑑賞することになるのだが、その際も、相手を見て、内容に即した豊かな表情で、アクティブに聞く、つまり積極的に理解しようとしている態度を相手に見せるという点では、素晴らしかった。聞き手としての熱意を示すために、タイミング良くうなづく、相槌を打つ、話のポイントを同じ

様式 15-1

言葉で言い返す、といった話し手にとってはよく聞いてもらえている感じを与え、会話を弾ませることができた。

敢えて苦言を呈すとすれば、その先のレベルである、相手が言ったことを別の表現で確認すると言う段階には、英語力不足のため至らなかった。これができるれば、より誤解が少なくなり、より積極的な態度が話し手に伝わり、会話をより弾ませることができる。こうしたスキルの養成法は、広く汎用性に富んでいると考える。

2015 年度

前年度参加学生へのヒアリングの結果、日本とアジア諸国にまつわる歴史的認識に欠けるという点が確認された。一般に「戦争」と言えば、思い浮かぶのは「広島、長崎」であり、アメリカとの戦争がイメージされる。「大東亜共栄圏って、何だろう？」と聞かれれば、言葉が出ない。中国や韓国で酷いことをしたのだらうということは、日頃の報道から想像できるものの、かつて東南アジア諸国を舞台に日本が行った残虐について知る者は少ない。

こうした状況を踏まえ、二年目の交流の特別企画として、ファシリテーターのアナ・カブエナス先生の協力を仰ぎ、セブ在住の高齢男性二名にインタビューを行い、日本占領下の様子について語っていただいた。タガログ語で行われた 10 分余りのインタビューに英語の字幕を付けた映像を、双方の学生たちが一緒に視聴した。

男性たちは、共に祖父を日本兵に殺害されていた。共に日本兵に自宅に押し入れられ、金品、食べ物を強盗された。その様子を今も覚えており、子供ながらに日本兵がとても恐ろしかったと当時を語った。一方で、多少なりとも救われる気持ちになれたことは、彼らの言った、「良い日本人も大勢いた」という一言である。知っておかなければいけないことは、日本軍の侵攻前、フィリピンには日本人が移民として暮らし、フィリピンの人々と共生していた事実である。この二人の男性も、近所には日本人が当たり前に住んでおり、当たり前近所づきあいをし、仲よくやっていたという。その平和が、1941 年 12 月 8 日の日本軍のマレー半島上陸、やや遅れての真珠湾攻撃を機に一変することとなった。

開戦当初こそ、表向きは「アジア解放」を謳う日本に期待をし、日本軍の進軍を歓迎する風潮もあったが、時間が経過するに従い期待は失望への変化し、抗日の感情は高まるばかりとなった。フィリピンは二度にわたって日米決戦の舞台となり、アメリカ軍の爆撃および銃砲火、対する日本軍の激しい反撃の結果、マニラを始めとする都市部の多くが灰となり、人的、物的被害は東南アジアで最悪と言われる。また、婦女子を含む非戦闘員の虐殺行為も多発した。日本軍は抗日ゲリラの掃討に苦慮し、アメリカ軍の再来に備えるべく、戦闘員・非戦闘員の区別なく粛清をはかったことが起因している。戦後、手を後ろに組んで縛られたまま捨て埋められた遺体が多数、掘り起こされている。抵抗できない者を殺害した、確たる証拠である。インタビューを視聴し、ヴィサヤ大学学生の一人が、こうコメントした。「起きてしまった過去を変えることはできませんが、私たちが一緒に未来を創っていきましょう」と。

本学学生へのヒアリングによれば、「日本がこんなにひどいことをしていたなんて、初め

様式 15-1

て知った」「戦争についてはほとんど知らない、学んだ記憶がない」「東南アジアが戦場とは知らなかった」「受験に世界史がなかった」「祖父母も子供だったので、さほど覚えていないし、加害者でないので、加害側のことは何も知らない」等々、知る機会がなかったということが知らない原因に他ならない。ならば知る機会を作っていくことが、できれば中学・高等学校レベルの学習の場に於いて、成長に応じた適切な方法で知る機会を提供することが、ファシリテーターの役目のひとつと考える。

2016 年度

交流の事前学習の一環として、参加学生には次の 20 の設問を尋ね、フィリピンを始めとした東南アジア地域における、太平洋戦争時の対日関係について、理解の度合いを調べることとした。正解最多数は 12 問正解が 2 名、正解が少なかったのは 5 問正解の 1 名であり、平均では 20 問中、10 問の正解数であった。交流参加学生の歴史認識の乏しさを改めて確認する結果となった。

これを踏まえ、別の角度から歴史を見る、知る、理解する手段として、学生たちにあるドキュメンタリー番組を視聴してもらい、内容について自ら深く掘り下げてみるという事前学習を行った。番組は NHK 制作の『憎しみとゆるし マニラ市街戦 その後』である。番組では、フィリピン B、C 級戦犯裁判において死刑、または有期刑を宣告され、モンテンルパ刑務所に服役していた 100 人超の日本人戦犯に対して恩赦令を出した(1953 年 7 月)キリノ大統領(当時)の決断について詳細が描かれている。キリノ氏が上院議員であったマニラ戦当時、市内の自宅がアメリカ軍の砲撃で破壊され、夫人は子供 3 人を連れて実家へと逃れようとしたが、途中、日本軍の狙撃兵に銃撃されて即死する。僅か 2 歳の次女までも、日本兵は生かすことなく刺殺した。激しい戦闘の続く中、遺体の収容すらできずに、自身も避難を余儀なくされた。フィリピン独立後、キリノ氏は副大統領に選出され、その後、大統領に就任。日本人戦犯への処遇は、大統領の抱える外交問題の一つであった。1951 年 9 月、大統領は対日講和条約に署名するものの、対日感情が甚だ厳しい中、フィリピン議会は野党の反対でその批准を見送った。それでもなお、大統領は死刑囚を含む日本人戦犯 105 名の恩赦を実行した。それはなぜか、を考えさせる番組である。

参加学生が当該番組から得た衝撃は大きく、この負の遺産を糧に両国がより良い関係を築いていけるように努力したいとの思いを強く持ったことこそ、学びの意味であり、価値である。日本人学生の歴史認識の欠如に対してフィリピン人学生は幼いときから日本占領期の史実について学ぶ機会が学内外に設けられている点を指摘する。日本で戦争が語られる際、それは主に被害者の記憶であり、アジア諸国において加害者であったことは声高に語られることはない。私たちが真に友好を結ぼうとするとき、この認識のずれが障害になりかねないことを、若い年代こそ知らねばならない。近代史について自ら調べ、仲間と話し合い、認識を新たにすることは、やはり広く日本の学生・生徒、そしてファシリテーターの課題である。

2018 年度

様式 15-1

小中高、そして大学と、英語の授業内では自分の話す英語が教員に通じないということはなかったはずなのに、外国に行ったらコーヒー一杯、ホットドッグ一つの注文すら、すんなりとはできないという体験談を耳にすることが少なくない。日本人の発声する「コーヒー」の音を“coffee”とは聞き取ってもらえず、「ホットドッグ」の音を“hotdog”とは聞き取ってもらえないからである。日本で英語を教えるネイティブ講師と違い、現地の人々は日本人の発音の癖を知らないのである。過去3か年に渡る交流において、大抵は本学学生のプレゼンテーションに対して反応の良いヴィサヤ大学学生たちの反応が止まる、フリーズするという場面が少なからず見られたが、これも同様の理由からのことである。彼らが直接的に日本人と会話するのは初めてのことで、当然、日本人の英語発音を聞くのも初めてであった。

なぜ通じないのか、それは日本人の英語発音が一般に下手なのではなく、そもそも違った音で単語を覚えていることが一番の原因と考える。通常の学校教育では英語の授業内で一つ一つの発音記号を教えておらず、学生はその存在すら知らない者も多い。英語の発音は日本語よりはるかに複雑で、従って口、顎の開き方、舌の動き方も複雑なのであるが、この音を発音するには口をこのくらい開ける、この音を発音するには舌先はこの位置にある、この音とこの音では舌の動きがこのように違う、などのような理屈を理解しないまま、なんとなく、すなわち無意識的にカタカナの音に当てはめて単語を覚えてしまうことになる。この結果、**match** と **much** を同じマッチと発音し、**walk** をウォーク、**work** をワークと発音することに疑問を抱かない学習者を増産してしまう。本プロジェクトの参加学生も例外ではない。初年度から三年度までの参加学生には、各年度とも長期留学経験者、また帰国子女が含まれており、ある程度、まとめ役として仲間をけん引し、他の参加者の力不足な点を補う役割を担うことができたが、今年度の参加学生に関しては該当する者がおらず、英語力についてはごく平均的な日本人大学生のレベルであった。意味するところは、**the** はザ、と発音し、**this** はディス、と発音し、**b** と **v**、**f** と **h** の区別はない。ここで強調したいのは、区別ができないのではなく、区別がないことである。つまりは意識がないのである。意識のないままに、例えば **item** と **correct** の **e** を同じに発音し、**my home** の二つの **m** を同じ長さで発音する。加えて、平坦な発音が特徴の日本語そのままにアクセントをつけずに発音する癖が染み付いており(音節拍子)、それが強勢拍子の特徴とする英語の発音の邪魔になってしまう。さらには、英語ネイティブが自然に話す際に起きる、音声学で言うところの同化、脱落、連結がリスニングの妨げの原因である。つまりネイティブの発音では、多数の音素が実際には発音されなかったり、変化して発音されていることを知ることは、自分の発音の向上させるためにも重要である。

これまでも、プレゼンテーション前には入念なりハーサルを数回にわたって行ってきたが、今年度の実施に際にしては各参加学生への個別の発音指導に時間をかけ、各自が正しい発音を十分に意識することを目標の一つに置いた。各自が用意した発表原稿に発音の注意点を細かく記入させ、何度も練習、「口練(くちれん)」するよう指導した結果、学生の発

様式 15-1

音は驚くほどに向上したと断言できる。リズムやイントネーションについても同様で、ファシリテーターと一対一で、10～20回、繰り返し練習すれば、全員がノン・ネイティブとしては満点に近い発音ができることがわかった。残る課題は、発表原稿を離れたフリーカンバセーションの場面で、いかに同じように発音できるかという難題であるが、これにはさらなる持続的「口練」が必須であることは言うまでもない。これもまた、極めて汎用性の高い学習方法である。

【研究内容の今後について】

参加学生によるエッセイでは、交流前は、「不安」がキーワードであったが、3回の交流を経て、「楽しい」「笑顔」「仲良く」「明るい」「楽しんでもらう」「喜んでもらう」といった表現に進化を遂げたことは成功であった。一方で、やってみて改めて英語力を上げたい、上げなければならない、という気持ちを強くした変化も読み取れる。この気付きこそが、それからの自分を構築するきっかけとなるに違いない。このように、交流によって未知の国であったフィリピンを身近に感じ、もっと知りたい、話したいという想いが強まる様子が見られることは大変好ましい結果である。この学習態度が今後もさらに続くことを願うばかりである。日頃から異文化に関心を寄せ、理解をしたいと考えていても、ある程度の解釈が得られたと感じられると、自分ではもう、わかった気になってしまい、さらに知ろう、理解しようという気持ちが薄れ、努力が止まる場合がある。異文化理解というものには、絶対的なものはなく、常に違った解釈があり得るし、より深いレベルのそれもあり得るのだ。そもそも文化は生き物であり、時間の経過の中で変化していくのであって、異文化社会への理解への努力にも到達点などなく、ずっと続く道であることを参加学生にはわかってもらいたい。

ファシリテーターとして痛感していることは、本プロジェクトにおいて各年次とも、セッションの結果が良好であったのには、何よりも参加学生間の連帯感、信頼感、信頼から生まれる安心感が鍵であったという事実である。小学校の教育現場でもアクティブ・ラーニングが強く推進されている昨今であっても、一般に日本の学生たちは自ら進んで発言することを良しとはしない。そのような環境で学生が発言しやすい、つまりは話しても大丈夫、恥ずかしくない、誰かに悪く思われない、と思える環境を、教員が全力で提供する必要がある。その環境こそが、仲間同士の、そして教員との温かい関係であると考えられる。学生の連帯がなければ活発な意見の交換は不可能に近い。仲間同士の共同作業をもって初めて、一人では得られない、より大きな何かを発見することが可能となる。仲間に肯定されること、プラスに評価されることで自信を持ち、お互いに成長を実感できるのである。これからもその環境を提供できるよう、後輩たちの指導にあたる所存である。

本学のみならず、双方の参加学生たちが口々に言うように、こうした交流は今後も末永く続けて行かねばならない、否、続けて行きたい。継続こそがより豊かな信頼関係を築き、将来のさらに強い絆の石杖となる。ヴィサヤ大学で行われた交流会のテーマとして、

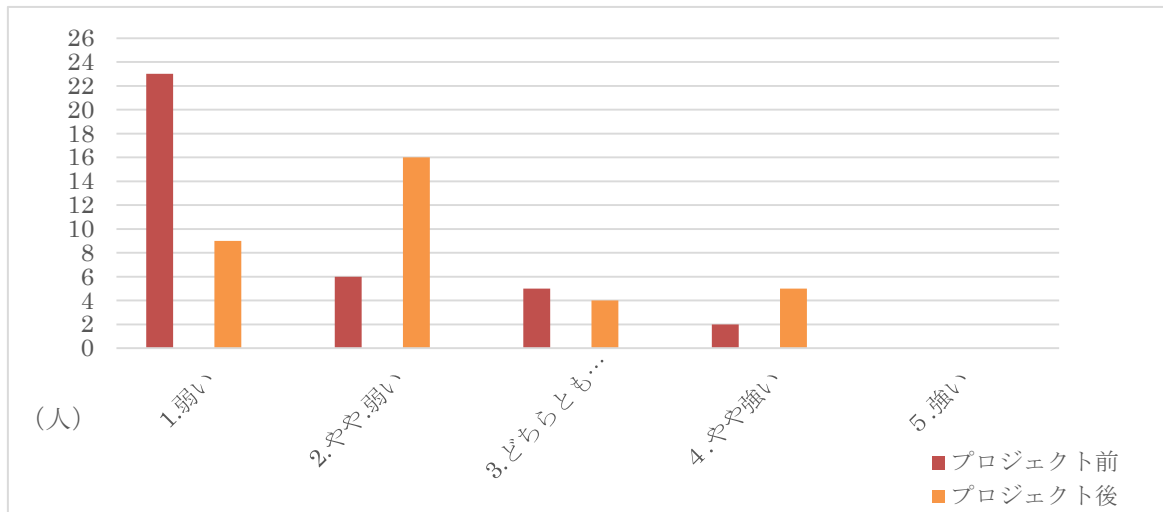
様式 15-1

“Collaboration is a key to success” とあったように、世界が協調する一助としたい。

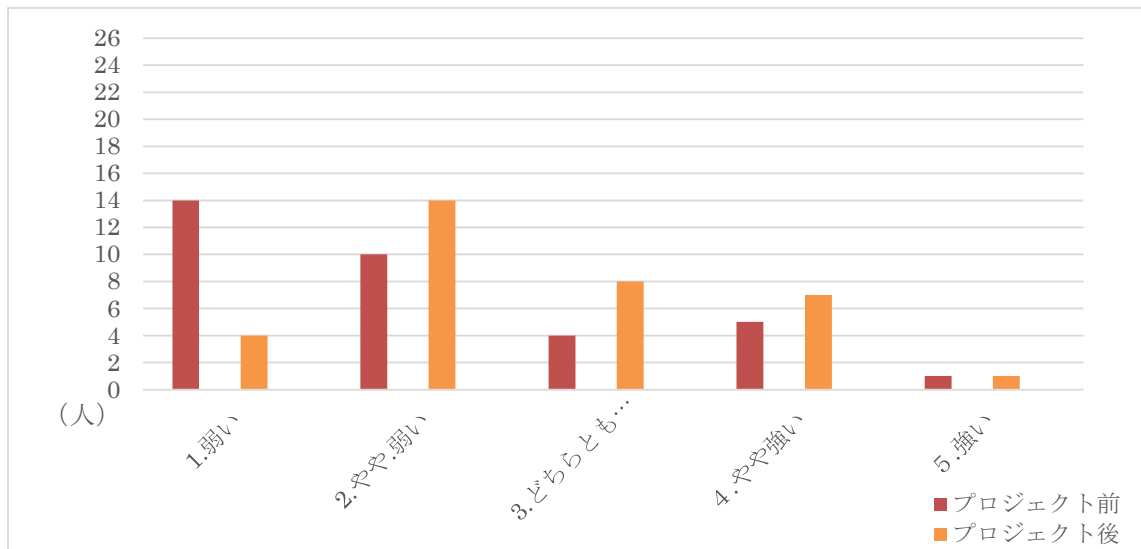
【総括（所感・達成度）】

達成度をはかる手段として、交流前後の本学学生の英語運用能力およびフィリピン理解についての 5 段階評価のセルフ・アセスメントの比較をおこなった。それぞれ 10 の設問を問い、交流の前後でどれだけの向上が見られるかをはかった。

英語運用能力の自己評価では、学生たちの謙遜からか、表現の機会があった割には評価が期待ほど伸びなかったのが現実である。例えば、「日本で起きている社会的な事象について説明したり、自分の考えについて述べるができる。」の問いには、



との結果が出た。「社会的な事象について」のプレゼンテーションは、例えば少子化の問題、女性の労働の問題などについてトピックとして取り上げたことがあったが、どちらもフィリピンにおいては社会問題ではなく、すなわち少子化でもなく、女性も日本以上に社会の中でアクティブに働いており、その比較は興味深いものだが、参加学生にとっては準備した原稿以上の言葉を口に出して応答することは難しい。逆に言えば、準備をすれば考えを表明できる訳で、より多くの準備、より多くの考えの引き出しを持てるよう指導することによって、

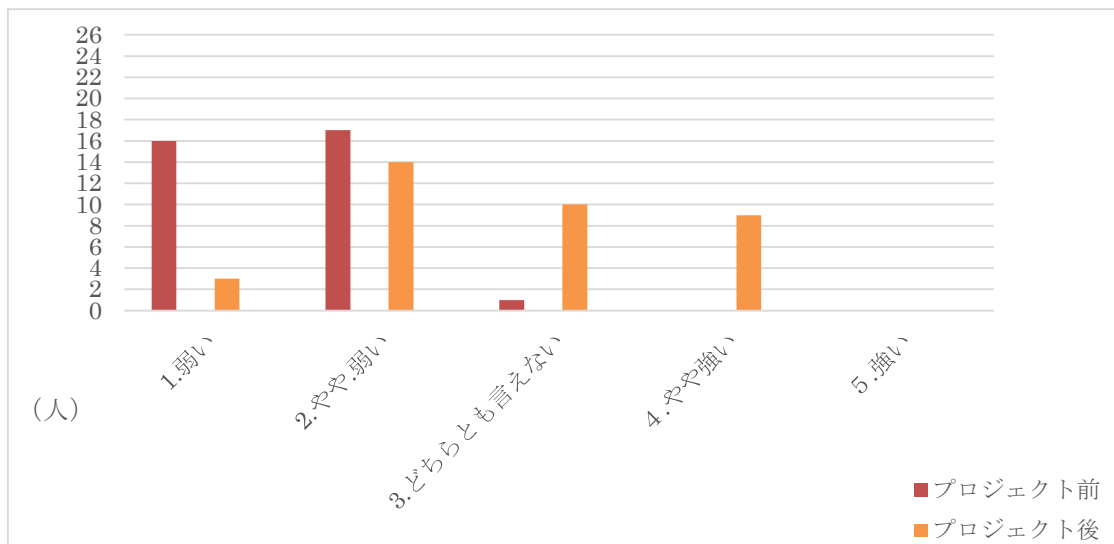


様式 15-1

さらに話題を深く掘り下げることが可能である。これも、次年度以降の大きな課題である。また、「日本の伝統文化、独自の文化について、相手にわかりやすく伝えることができる。」の問いには、

との結果が出た。全セッションを通して、日本の伝統文化の紹介をしてきたが、その難しさを改めて参加学生たち痛感したと、ヒアリングでは聞かれる。自文化であっても意外に知らないことが多く、さらにそれを英語で説明するとなると、やはり十分な準備なくしては非常に困難である。重ねて述べることになるが、十分と思われる以上の準備があれば、相手の関心に合わせてさらに豊かに日本を語れると考えられる。全体の設問を通して最重要課題は、現在の英語の実力以上に困難と思われるトピックでも、既知の単熟語に加えて新しい表現を覚え、できる限りの背伸びをする機会を設ける必要があるということと結論する。参加学生は自分が交流で紹介し、相手に理解された事項については一定のポジティブな評価を自分に与えることができ、その自信はさらに頑張ろうという動機づけになる。一方で、その機会のなかったトピックについては、英語ではもちろん、母語である日本語であっても自分の考えを伝えることは容易ではない。それは、日常にその習慣がないからに他ならない。欧米のようにターン・テイキングの概念が一般的ではない社会においては、平等な話者として責任を果たす、という概念には乏しく、議論という場面についても、学生の発言を促すことは大変である。それがゆえに、習慣として定着するよう、常に英語で話す、議論するという訓練を日々、続けねばならない。

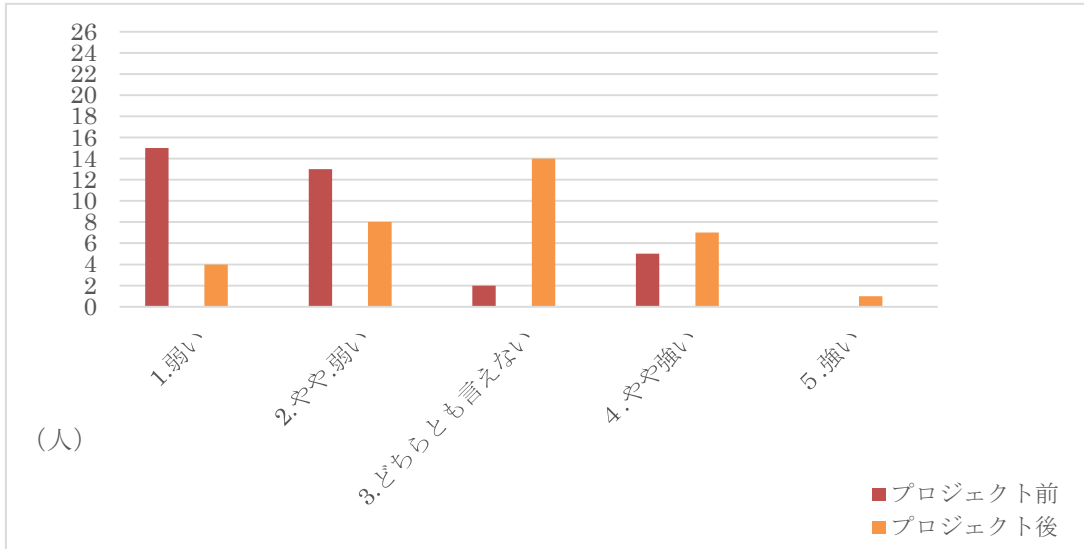
交流相手国のフィリピンについての理解度に充てたセルフ・アセスメントの結果の一例を示す。「フィリピンの共和国の歴史的過程について理解している」の問いには、



との結果が出た。350年におよぶスペイン支配、50年におよぶアメリカ統治、3年間の日本占領を経て、1946年に共和国として独立を果たしたフィリピンの歴史を、本交流に際して本学学生に学ぶ機会を設けたが、強い、と答えた者がいなかったのは、少し学んだがゆえに無智であったことが強く認識され、何も知らなかったという、もっと知らねば、とい

様式 15-1

う意識の結果であると推測できる。また、「日比間の文化的な関係について理解している。」の設問では、



の結果が出た。「文化的な関係」という表現がいささか難解に響いたかも知れない。低地キリスト教文化に一括されるフィリピン文化は、古き土着の文化、中国、スペイン、アメリカなどの文化が歴史の中で発展、生成されたものといわれる。スペイン支配の遺産である教会を中心とした町空間とカトリックの信仰、アメリカがもたらした民主主義の理念と英語による学校教育、ポップカルチャーなどの外来諸要素が混然として現代のフィリピン文化を構成している。そして日本との文化的関係と言えば、ヴィサヤ大学学生がロ々に述べるアニメ、マンガは、最も好意的に受け入れられている日本的なるものと言えるのは確かである。ある学生は、「ドラえもんなしでは、フィリピンの子供はいられない」とまで語った。

メディアの急激な発展によって、外国の文化が容易に、瞬時に誰もの目耳に届くようになり、映画にせよ、音楽にせよ、もはや国境は無いに等しい。日本発のアニメやゲームも、フィリピンはもとより世界中の子供たち、若者たち、ひいては大人たちの心を捉えて離さない。その意味で、今に生きる私たちは、これまでになく世界中の多くの人々と知識や感情を共有しており、国境という人工的に引かれた線に、少なくとも文化の面ではあまり意味がなくなっている。特にポップカルチャーの世界的共有は、伝統文化の壁を容易に乗り越え、異文化間の意識的距離を縮めている。世界的な共通項の増大は、望ましくこそあれ、否定すべきことではないと考える。

各年度、交流終了後にヴィサヤ大学学生に寄せていただいた感想より、特徴的な表現、キーワードを以下に挙げる。

様式 15-1

“one of the best experiences ever” 「これまでで最高の経験のひとつ」

“a milestone in my life” 「私の人生の分岐点」

“an unforgettable experience” 「忘れられない経験」

“an amazing experience” 「素晴らしい経験」

“a great experience” 「偉大な経験」

“This would be one the greatest times I’ve had in my whole life.”

「これは人生の中で最も素晴らしい時の一つとなるだろう」

“Their team work is a way of discipline that we also learned.”

「彼らのチームワークは、私たちが学べた一つの教訓だろう」

“I always look forward to meeting my Japanese friends, even if it’s only online.”

「たとえオンラインであっても、日本の友人に会えるのがとても楽しみです」

“With every GEO meeting, I feel that I am actually travelling around Japan and I have the most adorable Japanese friends to tour me around.”

「交流のたびに、本当に日本を旅しているようでした。そして日本のとても素敵な友人たちが私を案内してくれているようでした」

“Through this GEO Project, we can make Philippines and Japan to be closer to each other.

「このプロジェクトを通して、フィリピンと日本をもっと近づけることができます」

こうした極めて好意的な感想ばかりが聞かれた。たとえ本学学生の英語スキルが十分でなくても、伝えたいと気持ちは十分に伝わり、英語力の不足を補う様々な創意工夫で、ヴィサヤ大学学生の心を打つプレゼンテーション、対話を可能にすることができたと評価できる。

4か年にわたるヴィサヤ大学学生によるプレゼンテーション、フリーカンバセーション、さらには訪問時の本学学生に対する対応、またヴィサヤ大学の諸先生方、スタッフの面々と接する中、交流のファシリテーターとして喜ばしく、有り難く感じられた点は、これまで日本的と思われてきたこと、すなわち日本人の特徴と言えることが、欧米人との比較からではなく、フィリピンの人々の中に実感として見い出せたことである。英語でコミュニケーションを取ろうとする際、つい、低コンテクスト文化がベースの欧米の感覚で話してしまいがちであるが、それは間違いである。自分の意見をはっきりと、言葉を尽くして相手に伝えることが求められる低コンテクスト文化の国々と異なる、相手の思いを察する態度、謙遜の表現、姿勢を示すことが大切な文化は日本独自のものではなく、フィリピンも同様、あるいは日本以上にその傾向が強いのである。したがって、フィリピンの人々と接する際、英語を話すときについて反射的に持つてしまう、英語圏的な価値観を用いないことが肝要となる。欧米人に比べ、この点でフィリピン人と共通性を持つ日本人は、よりスムーズなコミュニケーションを取ることができる可能性が大きい。実際、フィリピン

様式 15-1

ンの学生から感じられる物腰のやわらかさ、温かみ、待ってくれる寛容性といった諸要素が、交流に不慣れな本学学生を勇気づけ、自信を持たせてくれたことは否定しようがない。

【決算報告】

年度（西暦）	補助金額（円）	執行金額（円）
2014	1,200,000	925,211
2015	1,730,000	857,567
2016	1,930,000	1,002,168
2017	800,000	374,000
合計	5,660,000	3,158,946

※年度ごとの決算は別途報告済み。

※補助金は次年度への繰越が認められているため、執行金額が補助金額を超える場合がある。